

[生徒指導]

問題行動を繰り返す生徒の母親との連携のあり方

- 受容・協働・移譲のプロセスの有効性 -

駒形加奈子*

1 はじめに

学校で、生徒が表出する問題行動は「一つ収束すると、また別の問題が発生する」という悪循環に陥ることが多々ある。文部科学省「児童生徒の問題行動等に関する調査研究協力者会議（第1回）議事録」（1998年）は、取組の問題点として、「その行動の意味や背後にある児童生徒の抱える問題に関する認識が乏しいため、適切な指導が行われないまま時間が経過しているなど、事態の程度についての的確な認識・把握ができていない」ことを挙げている。つまり、行動の意味や背後にある問題、彼らの「心のメッセージ」に向き合わなければ解決につながらない。多くの問題行動は、父母関係、家族関係、学校の集団力動と深く関連し、多面的で複雑である。Benesse教育研究開発センター「校内暴力・学級崩壊について」のアンケート（2006年）によると「校内暴力」発生の原因では、「家庭での教育のしつけが低下した」「幼少期からのしつけ、生活習慣、社会性が積みあがっていない」「親が生活・態度に干渉しなくなった」などが上位を占めている。生徒の問題行動は家庭要因がかかわっており、その解決には学校だけでは限界があると痛切に感じる。

生徒の「心のメッセージ」と向き合い、問題解決へと向かうためには、家庭と学校が連携、協力していくことが不可欠である。しかし、問題行動を繰り返す生徒の家庭との連携は難しさがあると感じる。なぜなら、問題傾向のある生徒の保護者は、長い間、学校から様々な連絡を受け、学校に対しての負い目、不信感、「家庭が原因です」と言われることへの恐れを持っているため、学校からの働きかけに対して受け応えることができないからである。そのような中であっても、担任は家庭との連携をあきらめるわけにはいかない。何らかのアプローチの方法を探さなければならない。

本研究の母親は、問題行動を繰り返し一向に改善が見られないわが子に対し、仕事で家庭を顧みなかった負い目から、どうしたら良いのか悩んでいた。しかし、相談する中で、子供のためになるならば、どんなことでも学んでいきたいという姿勢が感じられた。このような母親に働きかけることは十分効果が期待されると思われる。そこで母親と協働し、家庭の役割を家庭に移譲していけるような連携のあり方を模索する。

2 研究の目的

問題行動を繰り返す生徒の行動変容を促すためには、学級担任と母親との連携が不可欠であるが、どのようにしたら学級担任が母親と連携できるのか、母親支援に焦点をあてた試みから探求する。そして、生徒の状態や変容を見据えながら「受容」「協働」「移譲」のプロセスを踏む連携のあり方について、その有効性を検証する。

3 研究の方法

(1) A男と母親について

A男（中学2年生）は、一定の仲間とともに授業中の離席、抜け出し、授業妨害を繰り返す。学校から問題行動の連絡が入ると暴力を振るう父を恐れ、母親への反抗、暴言を繰り返したため、両親も何も言わなくなり、家庭で孤立していった。自分の将来については投げやりである。学校からの文書が届かず、催促するとA男の直筆で返事が来る。学校からの連絡を受けるのは専ら母親で、学校も家庭に一方的に改善をお願いするだけであったため、成果が見られなかった。母は勤務の関係で、朝は早く家を出て、帰りも遅い。夜は父と弟で過ごす。A男が家事をすることが多い。弟の世話もしている。住居は2DKのアパートで家が狭く、自分の空間がない。

* 魚沼市立守門中学校

(2) 母親支援のプロセスと支援のポイント

「受容」「協働」「移譲」の3段階に分けて母親支援のプロセスを検証する。

① 受容（9月中旬～10月中旬）

学校と家庭の連携のために、保護者（親）の思いや願い、考えに心から耳を傾ける段階

[ポイント]

- ア 相談は、大きな問題が起こってからではなく、時期を選んで行う。
- イ これまでの母親の努力を認め、思いや願いをありのまま受け止める。
- ウ 過去に原因を求めず、A男の未来のためには、今何をするべきかという視点で考える。
- エ 「一緒に考えましょう」という姿勢を伝える。

② 協働（10月下旬～3月上旬）

情報を共有し、家庭と学校で、できることを分担して働きかける段階

[ポイント]

- ア 「学校からの連絡＝悪い知らせ」を「学校からの連絡＝色々なことが分かる（楽しみ）」に変える。
- イ A男の頑張ったことなどありのままを伝え、常日頃から母親とのコミュニケーションを図る。
- ウ 家庭では、何が起ころうともA男のありのままを聞いてもらう。
- エ A男の問題行動には、意味づけを行い、どうすべきだったのか導く。
- オ 提案は具体的に、且つ、お互いに無理のない、可能なことから心がける。

③ 移譲（3月中旬～3月下旬）

本来の家庭への機能へと戻し、成果を認め、見守る段階

[ポイント]

- ア A男が持つリソースを見つけ伸ばす。
- イ リソースをもとに、家庭での役割を与え、所属意識を高める。
- ウ 父親とA男のかかわりを増やす。
- エ 移譲後もいつでも相談できる態勢があることを伝える。

(3) 検証の方法

2年後、当時のメールなどを手がかりに母親がその時どう感じていたのかインタビューする。母親の振り返りにより母親支援のプロセスが働きを成していたのかを考察する。

4 実践の概要と検証

(1) 受容の段階（9月中旬～10月中旬）

① ねらい

問題行動が起きてからでは、日頃の連携を保護者に依頼することは困難である。そこで、大きな問題が起きていない時期を選び、面談を持つ。そして、これまでの母親の努力を認め、思いや願いをありのまま受け止め、「一緒に考えましょう」という姿勢を伝える。

② 担任と母親の連携

母親と面談をもつ。子育て研修会の日に設定した。学校での様子、家での様子を情報交換する。電話よりもメールで済むこともあるのでアドレスを交換する。その後、学校で行われていた「夜なべの会」（子育て研修会）に誘い、母と一緒に参加する。

参加者が子役、親役になり、子どもへの声かけの誤った例、効果的な例をロールプレイングする。担任も親役になる。研修会の資料をもらい、講師（生徒指導担当）と母と話をする。夜、「とても勉強になった。」という内容のメールを母親からもらう。

③ A男の変容

相談後、担任への攻撃が強まった。ものが壊され、教卓が外に放り出された。特別支援の交流生徒へのからかい、暴力、授業中の立ち歩き、妨害行為がひどくなった。学校の電話番号を着信拒否設定にした。

④ 実践の評価（母親の振り返り）

相談に来るまでは、相談することで現状がどう変わるのか、学校が何かしてくれるのか理解できなかった。「家でも学校でもA男の気持ちを理解し、一緒に支えていきましょう」「A男のために今何が必要か考えましょう」という励ましの言葉ももらい、ありのまま何でも相談しようという気持ちになった。そして家でも学校と同じスタンスでA男に向き合った。しかし、学校との面談後のA男は何を言っても伝わらず、「俺を操る気か」と反抗的だった。A男の両手を掴み、「先生方や周りの大人が本気でA男を支えようとしている。今そのことがわからなくても覚えておきなさい。」と泣きながらA男に気持ちをぶつけた。このとき、A男は返事をしなかったが、泣いていた。あの頃が一番大変な時期ではあったが、辛いという記憶ではない。むしろ、先生方、夫、いろんな人に支えられてやり場のない気持ちを、吐露する場があった。

⑤ 受容段階での考察

母親は、面談後「一緒に支えていきましょう。」の言葉で、学校を信じて自分も頑張ろうという気持ちになったと振り返っている。相談を開始した直後のA男の変容は、担任と母親が結託して、自分をどうにかしようとしていると感じ取ったためである。母親は学校とともに本気でA男と向き合う覚悟をA男に見せた。これがA男の心を動かすきっかけとなったのではないだろうか。受容段階の母親は、まず、振り返りにもあるようにやり場のない気持ちを誰かに聞いてほしいと強く願っていた。相談を継続することでそれを保障されたことが有効であった。

(2) 協働の段階（10月下旬～3月上旬）

① ねらい

問題行動には、A男のありのままを受けとめ、真摯に向き合い、家庭と学校とで同じ方向を向いて指導・支援にあたるよう働きかける。（ここでは問題となった出来事の時系列に沿って記述する。）

問題1 特別支援の交流生徒と喧嘩 10月27日

給食準備中に特別支援で交流に来ているB男の首の辺りを蹴る。A男に確認したところ、朝学活でパーで肩を叩かれたことへの仕返しだという。A男にケガはないが、B男の首にアザが残る。

② 担任と母親の連携

喧嘩の概要と指導の内容をメールで伝える。B男の家庭には、概要とA男が後悔していると伝えてあること、A男の希望で謝罪の会を開く予定があること、B男と距離を置くように指導したこと、両親に知られるのを嫌がっていたが、もしもB男の両親が憤慨し電話があった際に、親が何も知らなかったでは済まされないと伝えて承知させたこと、A男には、ありのままをきちんと両親に話すように言うことなどを伝える。母親は謝罪の電話を入れる。

③ A男の変容

校長より、A男に直接指導があり、離席なく過ごす。「校長に怒られたからな」と言う。給食はC男と楽しそうに食べていた。B男への謝罪の会で素直に謝る。

④ 実践の評価（母親の振り返り）

学校から連絡がきて「またやったか」「何をしたのか」という気持ちだった。学校に出向いたり、謝罪の電話をいれることは、相手の親御さんの思いも察して、きちんと受けとめ、向き合えないといけないと思った。子どものことは信じたいが、事実を公平に受けとめ、対処するよう心がけた。

問題2 授業中のトラブル 11月20日

授業中、D男（A男と行動をともにしている）が黒板消しを持ち出し、E先生が注意すると、D男から黒板消しを手渡されたA男が、E先生に黒板消しを投げ、Yシャツとブレザーを汚してしまう。

② 担任と母親の連携

トラブルの概要と指導の内容をメールで伝える。D男に「投げろ」と言われてやったこと、A男はD男には逆らえないこと、やられた相手の気持ちを考えさせたこと、A男が後悔していること、汚してしまったブレザーをA男が洗うと言っていることなどを伝える。母親が、帰宅途中に学校を訪ねる。概要をもう一度説明し、クリーニングをお願いする。

後日、母と学校で面談。制服ズボンの裾がほつれているので縫ってもらえないかと伝える。教室に居られず、別室で過ごした際に教頭先生が、A男との雑談の中で、A男が鉄道に興味があるようだを教えてくれた。そのことを母に伝える。家庭で学校のこととは関係ない雑談の時間を作って欲しいとお願いする。

③ A男の変容

母は青春18きっぷで一人旅を楽しむ知人の話をA男に伝える。A男は大変興味を抱く。D男と距離を保つよう心がけている。トラブルに巻き込まれそうになると教室に行かず、別室で過ごし、対応した職員と会話を楽しむ。大人扱いをするととても喜ぶ。1対1のとき本音を言うことがある。

問題3 ガラスを割ったと申し出る 11月26日

清掃時に被服室のガラスが投石によって割られる。全体に書き取りによる情報提供をさせる。A男は「自分でやった」と書いてくる。夜、電話でA男に確認すると、「やっていない」と言う。どこにいたのかなど確認すると、あやふやな点がたくさんある。

② 担任と母親の連携

A男の様子とガラスを割った事件の概要をメールで伝える。A男の話にはあやふやな点があるので、話を聞いてほしいこと、A男は、D男とは、良い距離を保っていること、「席にじっと座っている。周りにチョコカイを出さない。」を目標にしてがんばっていることを伝える。そして家庭でも学校でも、出来たことをしっかり認め、A男との雑談の時間を増やしていくことを確認する。

その後、F男が石を投げてガラスを割ったと申し出る。A男は関わっていたのか、脅されていないか、話を聞いてもらう。弱い立場の者へ罪を押し付け、周囲が口裏を合わせることは絶対に許し難いこと、嘘をついた周囲の者へも指導すること、書き取りから証言がたくさん出ているのでA男が言ったことには決してならないこと、A男の本音が聞きたいことを伝える。A男は父に知れるのをとても恐れている。父にもじっくり話をする機会をつくってもらう。

③ A男の変容

翌日、A男は心身の不調を訴えて登校を渋った。母は、思い切って仕事を休み、A男とドライブをした。大好きな「青春18きっぷ」に関する本を買って帰った。その日の晩、父とA男でどんなルートにしようかと家族旅行の計画を話し合った。

問題3 以後の経過 12月1日

② 担任と母親の連携

母の帰宅途中、担任の家の近所のコンビニで待ち合わせ、担任の車の中で面談。お互いの子育てについて話す。担任の子育てについて、自分も忙しいが触れ合いを工夫していることなどを自己開示する。母は「青春18きっぷ」で家族旅行の計画を立てていることを話す。母親に家にあつたみかんと柿を数個手渡す。

翌日、メールで昨夜のお礼と、「可能なことから」と添えて一つの提案をする。

- 1 朝食は一品でも手作りで（食べても食べなくても一手間かけて）
- 2 夜のお茶会をご両親と3人で（弟さんが寝たあとにでも）
- 3 時々身なりを見てあげる（汚れていたり、破れていたら、洗濯、繕いものを）
- 4 話をよく聞いてあげる（父には大人扱いの場面を作ってもらうこと

出来たことをしっかり認めてあげる

母からメールで、みかんと柿のお礼とともに、さっそく取り組んでみることを、すぐには難しいけれど、少しずつA男の気持ちをほぐしていけるよう、頑張ってみると返事をもらう。

12月10日、合唱コンクール後、市民会館で面談、A男に少し変化が見えてきた。母はA男と素直に話せる時間が増えてきたと話す。

③ A男の変容

きれいに縫ってあるズボンの裾のことを尋ねると、嬉しそうに「親には逆らえないからな。」と答える。12月中旬、三者面談。担任の「お母さんはあなたのことで知らないことはありません。」という言葉に「怖ええ〜」と言いながら目は笑っている。母親の関心が自分に向いていることが嬉しそうである。家で自ら勉強する姿がみられるようになった。

④ 実践の評価（母親の振り返り）

学校から、様々なメールをもらうが、あらかじめ情報ももらっていると、学校から帰宅したA男の態度の理由がわかり、「今日はそっとしておこう」、「今日は話を聞こう」など、適切な対応ができて有難かったと母親は振り返っている。

母は、子どもたちより早く出勤するので、朝食におにぎりを作って置いていくことを今も実践している。A男が高校生になってからは、弁当も作ってから出かける。A男は、学食もあるから、大変だから無理に作らなくていいと言うが、

「お金がもったいないから」と毎朝続けている。今では、すっかり習慣になって苦にならない。途中、下の子には電話をし、A男には「行ってらっしゃい」と携帯にメールを送る。A男は「わかった」の一言の日もあるが、必ず返事をメールしている。

問題4 トイレで水をかけられる 3月2日

昼休み、A男がトイレで複数の男子生徒から水をかけられる。好ましくない人間関係の中でA男は無抵抗だった。それ以前も、複数回かけられていて、髪を濡らして教室に来るのを担任が見かけていた。A男から事情を聞いて発覚する。父親とA男に学校に来てもらう。

② 担任と母親・父親の連携

父、本人と面談をもつ。今回のことをうやむやにすることは状況を更に悪化させる。逆に、きちんと向き合うことは、好ましくない仲間との縁を断ち切るチャンスである。父にも毅然と対応してもらう。A男にも勇気を出すように励ます。報復があったら、警察への連絡も辞さないと父と確認する。その後、母が、G男（今回の加害生徒）の母が謝罪に来たこと、A男もこの件については、気持ちの整理がついていることをメールで伝えてくる。

③ A男の変容

父と一緒に風呂に入るようになる。体のこと、電車旅行のことなど男同士の会話がはずむ。修学旅行の用具を母が揃える。修学旅行参加については多少渋りもあったが、家族の応援、班の人間関係の配慮などで、三日間過ごすことができた。旅行中、大好きな電車の写真をデジカメで撮っていた。

④ 実践の評価（母親の振り返り）

G男さんの親御さんも辛かっただろうと思う。親はみな、子どものことを大切に思っていて、自分の子どもが同じ思いをしたら切ないということが、G男さんにも伝わるといいなと思っていた。

⑤ 協働段階での考察

問題1は、1対1の問題行動であったが、次第に仲間とのかかわり（上下関係）での問題行動へと変化し、問題4でいじめが起これ、その関係が決定的になる。担任の前では本当のことを言わないA男だが、家庭の働きかけで本音を出せる環境づくりをお願いした。母親は、朝の手作り料理やズボンの修繕をしてくれた。好ましくない仲間からの誘いに、A男が嫌がっているのを察して、用事を作って断ってくれた。父親は、A男と男同士の付き合いをしてくれた。全力でA男を守るからと勇気づけてくれた。また、母親には一層、父親とのかかわりを増やしていくこともお願いし、いよいよ本来の家庭の機能に戻す移譲の段階への準備に向かう。家族がA男の望む方向に気持ちを一つにして努力する姿が見られた。

(3) 移譲の段階（3月中旬～3月下旬）

① ねらい

A男が持つリソース（鉄道への興味）を伸ばし、それをもとに、家庭での役割を与え、所属意識を高める。

② 担任と母親の連携

母親との面談をもつ。A男のリソースをもとに、家庭での役割を与え、任せるよう提案する。そこで、母は一人旅がしたいとA男に持ちかけ、母の一人旅をA男が企画する。その後、A男は、ばんえつ物語号での家族旅行を企画する。春休みに旅行が実現する。

担任の転勤が決まり、あいさつのメールをする。今後も相談できる態勢があることを伝える。

（担任から母親へメール）

このたび転勤することになりました。離任式の花束贈呈はA男さんでした。はにかみながらステージに上がってきました。花束を受け取って握手しました。一年間お世話になりました。私にとって一日一日が宝物です。本当に濃い実り多い一年でした。貴重な体験だったと心から感謝しています。果たしてA男さんにとって良い担任だったかは？ですが、お母さん、お父さんには、おおらかに付き合っただき本当にありがとうございました。何かありましたらいつでもご連絡ください。

（母親から担任へメール）

お返事が遅れて申し訳ありません。新しい学校はいかがでしょうか。1年間本当にお世話になりました。親として、人としてたくさん学ばせていただきました。今のA男がいるのは先生方の温かい愛情のおかげです本当に感謝いたします。

春休み中には、家族4人でばんえつ物語号に乗って旅してきました。いよいよ最高学年、受験生となります。励ましながら、一緒に頑張りたいと思います。先生もお身体に気をつけて、頑張ってください。これからも学校は違いますが、同じ年頃の子どもをもつ母の先輩として、アドバイスなどいただけるとありがたいです。

④ 実践の評価（母親の振り返り）

仕事が忙しく、家庭を顧みない日々を思うと、私のせいでこうなったのだという思いで一杯だった。先生方が、一人の人間としてA男に本音でぶつかってくれた。自分もそうあろうと心がけた。あの当時のことをA男と笑いながら話せる。「あの頃の俺ってひどいよな」と振り返ることができる。今振り返ってみると、A男はいい階段を登れた。あのときがあったから、親になれたし、家族もつながり合えた。

⑤ 移譲段階での考察

A男のリソースである鉄道への興味をさらに伸ばし自信をつけさせる段階であった。母親の協力で、A男は母の一人旅を企画する。旅行中、乗換え場所について母がA男に問い合わせると、手際良く説明してくれたそうだ。自信をつけたA男は家族旅行を企画し、春休みにそれを実現させる。家族はA男を信頼し任せてくれた。協働段階で、父との関わりをお願いしてきたが、移譲の段階で父は、兄貴のようにA男と接してくれた。2人でいろいろと男同士の話をしている。また、一緒に書店でA男の大好きな電車関係の雑誌やDVDを買うなど、A男の興味のあることに関心をもって付き合ってくれた。この段階では、あまり、細かな要求をしなくても家庭でできることを母親、父親ともに行ってくれるようになった。

5 まとめ

問題行動を繰り返す生徒の変容を促すために、母親と学級担任がどのように連携していけばよいかを検討してきた。「受容」の段階では、母親と学級担任との信頼関係を築くことが最も重要である。学級担任との信頼関係によって、母親がA男のありのままを受け入れ、乗り越えていこうとする構えがみられた。学級担任がA男の自立を願うパートナーとして、同じ目線で協力する姿勢を見せたことが有効であったと考えられる。次に、「協働」の段階では、A男がありのまま自分の気持ちを表現できるように関係を構築することを目指した。そして、A男の好ましくない仲間関係を断ち切るため、学級担任が適切な情報と具体的な指示を出し、母親がA男の支援に当たった。また、学級担任が同じ中学生の子供を持つ母親であったため、自分自身の失敗談、体験談を語る事が有効であったと思われる。その結果、A男と母親が同じ方向を見て、互いに成長をしていく姿が見られた。「移譲」の段階では、学級担任が自然な形で家庭にその機能を戻していくことを目的としたが、A男のリソースの発見が大きな変容のきっかけとなった。A男のリソースに、家族が寄り添い、信頼して物事を任せることがA男の自己有用感や自信につながった。問題行動を繰り返す生徒が、大人が信じられない時期を乗り越え、何があっても、最後まで向き合ってくれる大人と出会うことで立ち直ることができた。以上のことから、この3つのプロセスによる母親と学級担任の連携がA男の変容を促すことに有効であったと言える。

現在A男は高校1年生である。仲間関係を断ち切るべく、地元の高校進学を希望せず、私立高校に進学し、家から電車通学している。中学校時は自分から起きることはなかったが、今は自分で起きて支度をして、6:30頃の電車に乗って通学し、大好きな電車に乗ることを楽しんでいる。風紀委員になり、当番の日は、始発の電車で行き、校門で挨拶、服装チェックを忘れずに行っている。自分の将来についても考えるようになり、勉強にも励んでいる。母親自身もこの選択は間違っていなかったと感じているという。

【引用・参考文献】

- 大阪府教育委員会 「学校・家庭・地域をつなぐ 保護者等連携の手引き」 2010年
 国立教育政策研究所 「生徒指導資料第4集 学校と関係機関等との連携～学校を支える日々の連携～」 2011年
 秋田県総合教育センター 「生徒指導における危機管理の在り方」研究紀要第34集 2002年
 Benesse教育研究開発センター 「校内暴力・学級崩壊について」 2006年
 文部科学省 「児童生徒の問題行動等に関する調査研究協力者会議（第1回）議事録」 1998年